

ですが画期的なものと思います。原作のクラウゼヴィッツの『戦争論』は、ドイツ語でも難解という19世紀の「名著」であり、日本語訳にしても読みやすいとは言えない難物で、「有名だが読まれざる古典」とも言われています。

また原作は、作者の急逝により脱稿されないまま残された遺稿を編纂し出版したことはよく知られた事実です。必ずしも原作者が意図したことが明確に統一的に述べられていないことも、よく知られています。また、編纂者の修文を改ざんと断定する研究書も存在します。難解さは、百家争鳴の本格的研究の対象にも成る理由であり、原作の名作ぶりが際立ってきます。

原作者の残したメモによれば、第1篇第1章は完成しているが、他は不十分なままであると明言しています。その中では、第8篇は、内容に自信があるので、「建築用材としての切石の集積」という評価です。読んでみれば、第1篇「戦争の本性について」と比較すると、第2篇以下は繰り返しの意味が明瞭でない部分が多くなり、表現ぶりの振れ幅が存在し、読み難くなります。第8篇「戦争計画」は、確かにまとまりがありますが、引用する戦例がナポレオン戦争の事例なので、理解困難で読みにくいという問題点があります。

そこで、著者はエッセンス（抜粋）

を「語録」という形で、テーマ別にまとめられています。こうすると、全篇に散りばめられている「切石」が、はつきりと見えてきます。「切石」というのは、クラウゼヴィッツの思想を端的に表したキーセンテンスのことです。これを直接確認できるところに、本書の最大の特長があります。

専門の研究者からは、抜粋のやり方、訳し方・テーマ別のまとめ方で批判が多いものと思いますが、初心者にとっては問題ないように十分吟味してあります。もちろん編者である加藤教授の考え方に従って編集されています。別のとらえ方があっても良いかもしれませんが、無理なく読み進めることができます。

解説書ではないのですが、興味を持った人を次の段階の入門に導くために、最終章に「読書案内」という、関連文献の解題があります。この内容も、短く簡潔で要を得ており、初心者にとって大変参考になる内容です。

後輩に「戦争論」は読んでも理解できないのですが、どのように読めば良いのですか」と聞かれて、「ともかく我慢して、岩波文庫の上巻138頁（第1章）まで2回読んでみてはどうだろうか。その後に、下巻の索引でキーワードを見て、その部分の前後を読むというやり方がある。重要な読むべき

キーワードと次の読み方の注意点は、第1章までを読み通したら教えよう。読んでみれば、だんだん、名著だと分かってくるものだ」と言うしかなかつた古典の読み方に、一石を投じた作品です。

もう一回、陸軍将校の嗜みとして、古典にチャレンジしようという会員諸兄に、本書を推薦します。きつと、「これはキーセンテンスのはずはない」とか、「こつちが絶対にキーセンテンスだ」とか「並べる順番が違うだろう」といった風に、頭脳が活性化されるはずです。そうしてから、原作全文を読み通すと、チャレンジが成功すると思われれます。 一藝社 1500円

広告目次

- (株) セレモア……………表紙3
- (株) 東京都民互助会……………表紙3
- ローレルバンクマシン(株)……………表紙4
- 信和株式会社……………36
- メモリアルアートの大野屋……………53
- (株) 武蔵富装……………58
- (株) 全国儀式サービス……………59

本誌へ広告掲載をご希望の方は、事務局へご用命下さい。

加藤秀治郎 編訳

『クラウゼヴィッツ語録』

『戦争論』のエッセンスを読んで

安全保障委員会事務局長

中川 義章 陸自78

本書の著者（編訳者）は、政治学が専門の東洋大学名誉教授で、佐瀬昌盛先生のお知合いです。

本書は、編訳すなわち抄訳になるの